

台湾の芸術文化振興についての考察

—木彫創作活動を中心に—

上原 一 明

A study on Art Culture promotion in Taiwan:
“On wooden sculpture fictionization”

UEHARA Kazuaki

(Received September 26, 2014)

はじめに

1990年代以降、台湾における民主化による社会変化は、政治・経済・文化において激動期を迎えた。特に文化面においては、国や地方自治体、商工会や大企業による文化振興への積極的参入と、外国留学先から帰国した台湾出身アーティストによる新しい芸術概念の導入、また外国籍アーティストの台湾移住による活躍等、充実した人材が一体となり、新しい台湾芸術を構築しつつある。

本論文は、筆者が参加した木彫創作活動の内容と、2000年代台湾の木彫創作における芸術文化振興について考察する。取り上げる事業は、国際木彫芸術シンポジウム（2009年）、建国百年国際木彫芸術活動（2011年）、阿里山大型木彫創作（2013年）の3事業で、いずれも中華民国台湾政府主催や地方自治体の主催によるものである。そこには公的機関による芸術文化振興促進の積極性がうかがえる。

1、国際木彫芸術シンポジウム

基本データ

事業名称：国際木彫芸術シンポジウム（中国語：國際木雕藝術薪傳創作營）

主催：苗栗県文化局国立三義木彫博物館

運営：力課堂整合行銷股份有限公司

期間：2009年7月27日～8月9日

制作場所：ウエスト・レイク・リゾートピア（西湖渡假村 West Lake Resortopia）

設置場所：国立三義木彫博物館

参加作家：総勢12名

台湾籍作家5名：林志航、尼誕・達給伐歴、黄弘彦、施振木、陳紀融

中国籍作家2名：黄文壽（福建省）、林文強（福建省）

外国籍作家5名：Vincente Orti Mateu（スペイン）、Salvador Marco Gisbert（スペイン）、
Nguyen Hoai Huyen Vu（ベトナム）、Tran Mai Qupc Khanh（ベトナム）、
上原一明（日本）

活動概要：

苗栗県文化局国立三義木彫博物館主催による国際木彫シンポジウムであり、14日間の制作期間で開催された。台湾の木彫作家及び外国籍の木彫作家が各自作品を制作する。コンプレッサー、チェーンソー等大型機械工具は主催側が準備し、特殊な道具は各自持参する。

この国際木彫シンポジウムは今回を含め数回開催されており、台湾の三義在住の木彫作家を中心に外国籍の彫刻家も招聘している。基本目標は台湾木彫の中心的存在である三義の木彫芸術産業の活性化であり、伝統的な木彫の継承と新しい造形理念の導入による台湾木彫芸術の革新的発展を目指している。参加した木彫作家は、台湾籍彫刻家の中から伝統系・現代彫刻系・先住民彫刻系の作家が参加し、中国籍からは福建省の人間国宝級の木彫作家の巨匠とその子弟の参加があった。中国伝統の木彫もあれば、現代彫刻や台湾先住民系と多種多様な表現形態が一同に揃い、造形的相互作用が発生した感があった。外国籍では現代の西洋造形で活躍する新旧のスペイン彫刻家の参加や、東南アジアの人文的でおおらかな造形感覚を持つベトナム彫刻家の参加があり、国際色豊かなシンポジウムとなった。この創作活動は、台湾における本格的な国際木彫シンポジウムの幕開けとなった。



図1 筆者作品構想デッサン

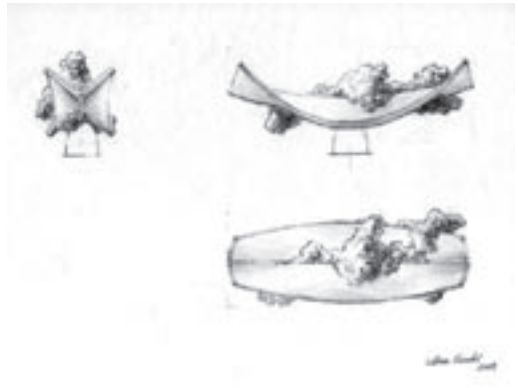


図2 筆者作品構想デッサン



図3 制作風景



図4 スペイン彫刻家の作品



図5 台湾と福建省彫刻家の伝統木彫

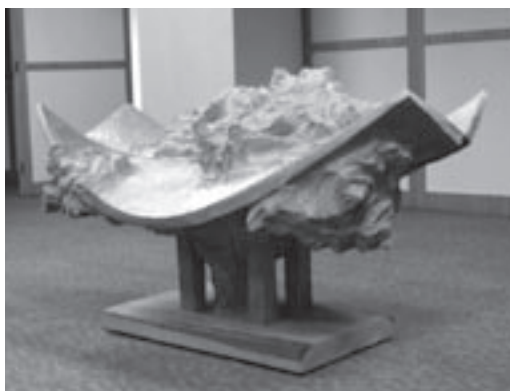


図6 筆者の作品

2、建国百年国際木彫芸術活動

基本データ

事業名称：建国百年国際木彫芸術活動

(中国語：「廻藝森林」2011年建国百年国際木彫芸術活動)

主催：行政院農業委員会林務局東勢林区管理处

運営：力課堂整合行銷股份有限公司

期間：2011年9月1日～9月27日

制作場所：台中市林務局東勢林区文化園区

設置場所：台中市林務局東勢林区文化園区

参加作家：総勢20名

台湾籍作家10名：尼誕・達給伐歴、石振雄、沈培澤、施振木、曾安國、魯碧・斯瓦那、
頼冬信、頼永興、藍文萬、陳徳隆

外国籍作家10名：Jaco Sieberhagen (南アフリカ)、金柱鎬 (韓国)、Kishor Rajbhandari (ネパール)、
Javer Astoraga (アイスランド)、Emil Adamec (チェコ)、Salvador Marco Gisbert (スペイン)、
Sigurgrir Thordarson (メキシコ)、吉田敦 (日本)、稲葉朗 (日本)、上原一明 (日本)

関連活動：若手木彫創作營

活動概要：

行政院農業委員会（日本の農林水産省に相当）林務局東勢林区管理处主催による大規模な国際木彫シンポジウムであり、約1か月の制作日程で開催された。建国百年とは、1911年の辛亥革命による中華民国建国から百年目を迎えた年であり、それを記念して開催された国家的記念事業である。用意された原木は全て台湾国有財産であり、台湾桧や牛樟等貴重な木材で、直径150～200cm、長さ10～15mもある巨木である。使用された木材はこの事業のために伐採されたものではなく、台風や豪雨などで山中から流れてきた流木である。これ程の巨木を彫刻制作出来る機会があること自体が非常に稀である。原木自体の市場価値も高価であることに加え、それを材料に著名な彫刻家達が造形的価値を与えることにより、完成されたその作品価値は非常に高くなる。

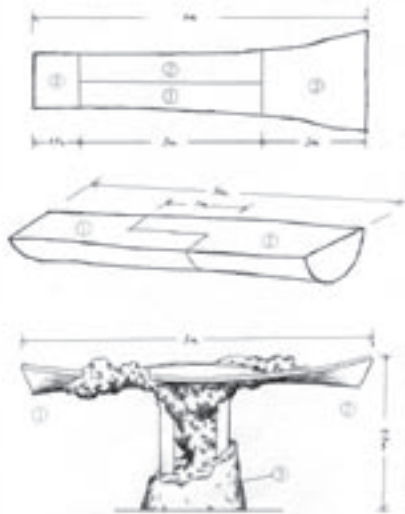
台湾における国際木彫シンポジウムの集大成ともいべき本活動は、招聘作家も台湾における中心的な木彫作家と世界的に活躍している外国籍彫刻家による総勢20名が参加した大規模なものとなっている。木彫制作規模が大きいため常時フォークリフトが導入された。また国立台湾芸術大学や国立台北芸術大学、大葉大学などの学生もボランティア・アシスタントとして各彫刻家の制作補助を行った。学生によるボランティア・アシスタントも次世代木彫作家育成の機能を担っており、これら活動に参加してきた学生らも近年精力的に作品制作発表をしている。

完成された大型木彫作品は、台中市東勢林区文化園区の湖の畔に野外設置されているが、木彫作品であるだけに、長年にわたる風化による腐食は避けられない。特に高温多湿な台湾の自然環境下においては定期的な腐食対策メンテナンスを施すか、将来的には全て屋内設置を考慮せざるを得ないであろう。



UEHARA KAZUAKI NO.1

図7 筆者作品構想デッサン



UEHARA KAZUAKI NO.2

図8 筆者作品構想デッサン



図9 台湾伝統木彫作家の作品



図10 南アフリカ彫刻家の高さ4.5mの作品



図11 筆者の作品（南アフリカ彫刻家と筆者）



図12 閉会式

3、阿里山大型木彫創作

基本データ

事業名称：阿里山大型木彫創作（中国語：「藝覽沼平」阿里山大型木雕創作）

主催：行政院農業委員会林務局嘉義林区管理处

運営：力譚堂整合行銷股份有限公司

期間：2013年2月13日～3月14日

制作場所：林務局東勢林区文化園區

設置場所：阿里山沼平駅構内

参加作家：2名

台湾籍作家1名：董明晋

外国籍作家1名：上原一明（日本）

関連活動：野外石彫設置、沼平駅構内木彫小品展

活動概要：

行政院農業委員会（農林水産省に相当）林務局嘉義林区管理处主催によるパブリック・アート設置事業。阿里山・沼平駅新改築に伴うパブリック・アート彫刻作品設置計画に、外国人アーティストとして筆者考案の作品案「山水人」が公募により採用される。筆者は樹齢500年・原木重量8 tの牛樟を彫刻した。台湾人アーティストは公募により新進作家・董明晋の作品「森林記憶」が採用され樹齢200年の台湾檜を彫刻する。採用品決定後、制作が開始される2か月前（2013年12月）に運営会社と共に保管場所の屏東県警察署へ行き、制作する指定された原木を確認する。原木はいずれも国有財産。制作は約一か月間、この2名のアーティストにより嘉義市北門駅車両修理所資材置場において公開制作し、多くの観光客も見学に訪れた。切断した端材、削った大鋸屑は重量を量り、シリアル番号記入後厳重に保管された。嘉義市内で作品完成後、標高2200メートルの阿里山・沼平駅に設置完了した。（3月14日設置）

以下主催者側に提出した筆者の創作コンセプトを載せる。

作品名：「山水人 - 阿里山を見守り、台湾を見守る-」（中国語：「山水人」守護阿里山・守護台湾）

作品創作理念：

阿里山は台湾の精神が宿る場所のひとつ。阿里山の精神は人間が自然に対する畏敬の念を表す象徴的な場所のひとつ。一日の始まりをご来光と共に神々しく感じられるひと時を過ごせる場所のひとつ。歳年の時を刻み育んできた巨木は常に台湾の歴史を見つめてきた。

阿里山は台湾の中心である。東に台湾の最高峰・玉山が鎮座し、北は風光明媚な日月潭が豊かな水を満たしている。西の山麓には嘉義市が繁栄している。この三つの要素である「山」、「水」、「人」は阿里山を守護していると同時に、台湾を守護している。この三つの要素を三角錐として造形表現し、阿里山の雲海に包まれた臨場感を表現した。

この作品は、五百年の年月をかけて成長した巨木の姿をあえて残すことにより、その巨木に対する畏敬の念を表すと同時に、これからこの地域を守護する自然と人間の調和を表現している。

創作主題：

私は1996年から2006年までの十年間台湾に在位していました。その生活の中で様々な台湾の歴史・文化・自然の素晴らしさを学びました。2004年の夏に家族と初めて阿里山へ行きました。平地の温度とは異なり、空気はひんやりとしていて、聖なる空間に足を運んだなと感じました。翌朝多くの人達と共にご来光を見に行きました。その朝焼けは見事なもので、さわやかなオレンジ色の空がとても印象的でした。

その時の阿里山で過ごした時の印象を、今回提供される牛樟でどのように表現したらいいのか？ 12月8日に屏東で高さ3.1メートル、直径2.3メートルという巨大な神木の姿を見ました。それは全体的に三角錐の量感があり、直感的に東の玉山、北の日月潭、東の嘉義市の人々という「山水人」の関係が浮かんできました。阿里山の聖なる土地をこれら「山水人」が守護し、同時に台湾を守護するという姿です。



図13 筆者作品構想デッサン

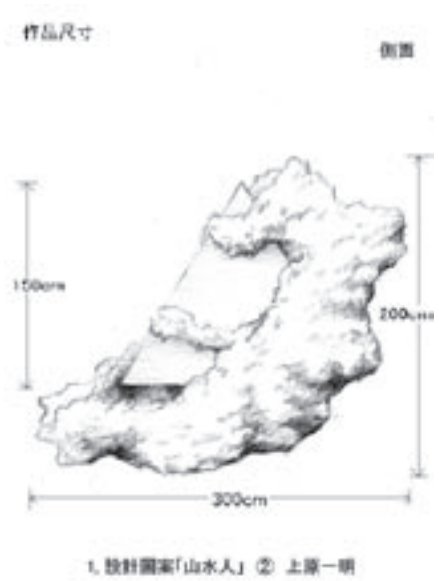


図14 筆者作品構想デッサン



図15 筆者と作品（側面）沼平駅構内



図16 筆者の作品（正面）沼平駅構内



図17 建設中の阿里山・沼平駅 右に登山列車



図18 台湾彫刻家の作品

4、台湾における芸術文化振興策とその成果

台湾は1987年の戒厳令解除後、社会は民主化へ移行し、同時に国民意識が台湾本土化へ向かった。これは「台湾の大学生における立体造形芸術の認識について」に集計されたデータが示すように、1990年代以降の芸術教育においてより台湾独自の美術教育が進行していることが理解できる。また、台湾本土化の内容をより多様化させるように、各地方都市ごとに芸術産業別博物館を置いていることも注目される。陶芸が盛んな桃園県鶯歌には陶瓷（陶芸）博物館、石材工場が集中する花蓮県には石彫博物館、木彫が盛んな苗栗県には木彫博物館といったように、各地方都市の文化的特色を関連観光産業に結びつけている。

現在の台湾における文化的特徴のひとつに、伝統文化の多様性が挙げられる。木彫における二分野の伝統芸術を保護しながら、海外からの最先端芸術も多く取り入れ、その融合も積極的に取り組んでいる。ここで示した台湾の二分野の伝統芸術とは、福建省から伝わった中国伝統芸術とパイワン族を中心とする台湾先住民伝統芸術を指す。後者については既に「ビル・リードと先住民芸術の再評価」において述べたように、台湾先住民彫刻の保護とその現代アートへの進化促進で示され、世界へ向けた台湾芸術文化のアピールに大きく貢献している。

この二分野の台湾伝統芸術、特に木彫芸術におけるこの二分野は近年特に注目されている。前出の国際木彫芸術シンポジウム（2009年）と建国百年国際木彫芸術活動（2011年）において、いずれも中国伝統木彫作家と先住民木彫作家が選出され、作品実績を残している。木彫シンポジウムにおける国外作家との同時制作は、台湾伝統芸術二分野の木彫作家にとって、伝統表現と伝統技術及び技法の固有性を確認すると同時に、台湾独自の新たな創作概念を模索する姿勢が培われてきている。特に若い世代にはその傾向が顕著にみられる。この二分野いずれも基本的に木彫道具として中国伝統の鋼鑿と榫棒槌を使用するため、緻密な彫刻制作の方向へ促す。その結果、極めて装飾的な象徴・物語性が強く前にでる作品となる。その伝統色を保持しながら、現代的でなおかつ先見的なテーマを以て制作発表しているのが、近年台頭してきた若い世代の木彫作家達なのである。

これらの国際木彫シンポジウムは主要な大型彫刻制作に加え、若手木彫作家育成を目的とした創作活動も同時開催している点にも、主催者側の明確な方向性が見て取れる。若手の木彫家は自身の作品を制作する機会と、世界的に活躍している外国籍作家や台湾国内で高い評価を受けている木彫作家の制作アシスタントをしながら、彼らの創作理念や制作方法、各種道具や使用方法などを直接学習する機会を得られる。近年の三義木彫博物館コンペや裕隆国際木彫コンペにおいても、これらの活動に参加してきた若手の木彫家の入選や入賞も増加している。

この5年間の活動だけでも以下の成果が確認できる。

- 一、「国際」と銘打つことにより外国籍作家を招聘し、国外の造形理念と最新工具の流入による台湾作家への良影響。
- 二、台湾木彫界のグローバル化への対応と、世界的知名度向上の貢献。
- 三、最新の現代木彫制作の促進と木彫イメージの改革。
- 四、中国伝統木彫保護の必要性和コンテンポラリーアートへの応用転換。
- 五、台湾先住民彫刻保護の必要性和更なる造形革新。
- 六、若手木彫作家の育成。

5、まとめ

これまで政治的に台湾と中国は三通（通商、通航、通郵）をお互い認めてこなかったが、2001年から厦門と金門島の間で限定的な「小三通」が開始され、2008年には双方の合意により一部を除いた本格的な三通が実施された。以後経済交流や人的交流がより活発となり、文化面においても様々な分野の芸術活動が展開された。彫刻の分野では2003年台北の世界宗教博物館において、中国大陸から塑像の神仏像（仏教並びに道教の像）を制作する仏師が招かれ、数か月間の現地滞在で巨大な仏像を制作した。伝統彫刻関連において正式に仏師が招かれ、その伝統技術の高さを披露したのである。また、2009年の国際木彫芸術シンポジウムにおいて、福建省の人間国宝級の木彫作家の巨匠とその子弟の参加があったことは既に述べたが、これらを含め、台湾と中国の間でも神仏像制作交流活動は盛んに行われており、互いの交流を深めている。背景には、神仏像彫刻制作、特に明時代末から清時代にかけて福建省からの移民に伴う仏師の系統が台湾で根付き、その伝統技法が保持されている。逆に中国大陸では1966年から10年間行われた文化大革命において、その制作技法の継承が衰退し、近年まで神仏像の制作維持が困難であった。このように互いに伝統技法伝承を繋ぎ合わせることで、中国伝統神仏像制作の関係性と人的交流を深めていく傾向も見受けられる。政治的に引き裂かれた民族的宗教文化の関係性の修復ともいえる側面をもつ。

このように、台湾における木彫関連の文化振興は、短年で効果的な成果を成し遂げている。それは主催者側の明確なビジョンにより、成果内容の伴う企画と運営の成功といえる。台湾は政治的に中国との関係が最重要課題であり、独自性をアピールするために政府及び大企業が様々な分野において積極的に介入する傾向にある。文化面において、特に美術分野はその視覚的アピールの効果が比較的大きく、目に見える具体的なカタチでその成果を得られる。文化的に高い国家は、政治に対しても優位になることを認識している。

ここまで国際木彫活動をとらえて、現代木彫概念の取り込みと中国伝統木彫及び台湾先住民彫刻の保護と革新、さらには若手木彫作家の育成という成果を得ていることを述べたが、最後にこれらとは異なる要素を取り上げる。それは台湾の近代史に関係する事柄であり、歴史を客観的かつ事実として肯定的に受け入れる現代台湾の性格を表す文化振興活動でもある。それが阿里山大型木彫創作（2013年）である。阿里山森林鉄道は日本統治時代（1895年～1945年）に敷設された標高2400mの林業用の鉄道であり、現在は観光施設として整備されている。観光地として非常に人気が高く、祝山からのご来光や春の桜祭りなど、国内外から多くの観光客を集客している。今回大型作品が設置された阿里山森林鉄道の沼平駅は、日本統治時代からの駅舎であったが、老朽化と近年来襲した台風の被害により倒壊してしまい、2013年に新改築された。日本人建築家を招聘し、当時の日本建築を参考にした半木造の駅舎である。現代風に新改築されたが、可能な限り当時の雰囲気を残している。また、阿里山森林鉄道を走る客車の大部分はディーゼル車であるが、観光用に当時の蒸気機関車を走らせている。そのほとんどが当時の車両もしくは、日本から引退車両を譲り受けたものを整備・運用している。そこには日本統治時代の歴史的事実を文化遺産として再現し活用しようという意識がある。

これら台湾における文化振興政策には、伝統文化の保護と現代的革新、次世代へ繋ぐ積極的具體策の実践、そして歴史をも自国文化の独自性へと昇華していく成果がみられる。

参考文献

- 1、頼永興・上原一明「台湾の木彫芸術について」2012年 山口大学教育学部研究論叢第62巻 第3部 p51-57
- 2、上原一明「台湾の大学生における立体造形芸術の認識について」2009年 山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第29号 p59-67
- 3、上原一明「ビル・リードと先住民芸術の再評価」2011年 山口大学教育学部研究論叢第61巻 第3部 p31-35